

農村伝道神学校学報

学校法人鶴川学院
農村伝道神学校
発行人 高柳 富夫

玉山神学院との交流続報

校長 高柳富夫

前号に続き、玉山からの交流学生のレポートを掲載します。改めて、この度の交流のために様々なご協力をいただいた方々、お祈りいただき、また献金のご支援をいただきました方々に、心より感謝いたします。次頁に会計の報告をさせていただきます。

これからも、神学教育をアジアの人々と教会との対話のなかで推し進めていく取り組みの一つとして大切にしていきたいので、ご理解とご協力、またご支援をよろしくお願いいたします。来年度は農伝から学生を派遣し、台湾での実習をさせていただくことになっていきます。

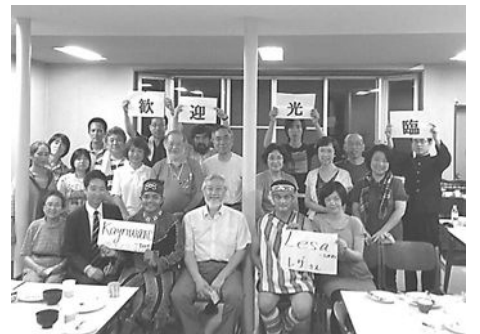
カイヌワン(ルカイ民族)

はじめに、農村伝道神学校との交流の機会をお与え下さった神様に感謝致します。農村伝道神学校(以下「農伝」)に到着してすぐ、私はこの学

校が大好きになりました。森林に囲まれたキャンパスはとても快適ですし、言葉こそ通じませんが、まるで古くからの友人のように私達を受け入れて下さり、本当にうれしかったです。校長はじめ、教職員や学生の皆様に大変お世話になりました。

農伝の学生はとても熱心で、まるで「特進クラス」の生徒のようでした。先生も、学生の習熟度を理解し、それぞれの力に合わせて授業を進めておられるようでした。見学した中に、中国語の授業がありました。学生は一人で、名前を川野恵さんと言います。先生は多田恵さんです。授業中の質疑が活発で、私達にも台湾の民族、文化に関する質問をいただきました。また質問の中には、「かつて日本は、台湾を植民地支配した歴史があるにも関わらず、三・一一地震発生時に、台湾はすぐに支援

の手をさしのべてくださった。歴史を遡ると、日本人への憎しみがあるはずではないのか？」というものもあり、わたしは次のように答えました。「もちろん、植民地時代に逃げれば、憎しみを抱くこともあったと思う。しかし、私達は今の信仰のゆえに日本に関心を示し、誰かが助けを必要としているなら、何かしなければ」といった想いに駆られるのだ」と。日本はクリスチャン人口が少ないけれど、福音の種を蒔こうとすれば、神様は私達の手を通して働きかけ、報いて下さると私は信じています。きっと彼女も同じように、どのような困難があっても、神様によって乗り越えられると信じているのでしょう。だからこそ、まずは中国語を学び、自分で直接、台湾や中国についての理解を深め、お互いに



前列左から3人目が筆者

関係をつくらうと願っておられるのだと思いました。また、彼女とは核の問題についても話し合いました。彼女は神学校に来て改めて、この問題は、すでに人間の限界を超えており、神の助けを求めるといふと感したそうです。

その後、私たちは、小田原教会と番町教会を訪問しました。実は実習を通して感じたのですが、どこへかがつても、日本の方々にはわたしたちを丁寧にもてなして下さり、家族の一員として迎えて下さいます。そうした経験によって、皆さんの信仰の篤さを感じました。番町教会では、主日礼拝の説教奉仕をしました。講壇から見渡すと、みなさんがとても熱心に聞いて下さったのが印象的でした。

続いての実習先は北海道で、アイヌ民族との交流が主な目的でした。北海道に着いた途端、眼前に広がる景色に心奪われました。見るもの全てが美しいと感じましたが、アイヌ民族情報センター主事である三浦牧師は、この素晴らしき大地は、かつてはすべてアイヌ民族のものであったにもかかわらず、日本政府が侵略し、全て奪い尽くしてアイヌ民族を追いやってしまったという歴史をお話し下さいました。アイヌ民族資料館を訪れ

た際、アイヌ民族と台湾原住民の文化とはずいぶんと似通っていることに気づきました。例えば、デザイン、言語、入れ墨など…。旭川のアイヌ民族資料館では、アイヌ民族の館長から、お話をうかがうことができました。アイヌ民族がおかれている現状は深刻かもしれませんが、文化を回復するため、こうして尽力している方がいる限り、アイヌ民族はまた立ち上がって新たな道を歩むことができるのではないかと、わたしは信じています。正直にいうと、わたしは北海道から離れたいと思いました。札幌ではドイツ牧師の住んでいる札幌富岡教会を訪れ、交流し、礼拝説教の奉仕をしました。いずれも素晴らしい体験でした。

北海道を離れ、私達は仙台へと向かいました。三・一一地震の被害についてお話を伺い、ボランティアアワークをさせてもらいました。被災地へ足を踏み入れると、私の中で、かつての記憶が甦りました。実はわたしも以前被災し、家を失った経験があります。そのため、この被災地の現実をまるで我が事のように感じました。住み慣れた土地が、もはや見知らぬ土地となり、生活のすべてをやり直さねばなりません。しかし再出発という

のは本当に困難を伴います！しかも、被災者の様子から、まだ多くの傷が残っていると感じました。何か力になりたけれど、どうすることもできず、今できることは、被災者のために祈ることだと思いましたが。被災者一人一人と神様が共にいてくださり、回復を助けて下さるようにと、ただ祈るばかりです。

その後は会津へ行き、農家の方々と交流を行いました。農業は時間的に融通がききませんが、出荷の際は大変な緊張が走る、ストレスの多い仕事だと思えます。出荷までの間に、もしも何か事故やトラブルが発生すると、経済的な打撃は計り知れません。特にこの地の農家は、一年のうち、半年しか作業ができず、特に気を遣うことが多いというこ

とでした。二七日の午後には、私達は若松栄町教会へ行き、被災者のお話をうかがいました。震災の被害は想像を絶するものでしたが、特に原発事故による影響は深刻だと思いました。というのも、家屋が無事だったにも関わらず、放射能汚染により、他県や他市へと移住を余儀なくされた人々が少なからずおられるからです。家族が離ればなれになる問題や、あるいは家族と離れて避難す

ることで、周囲や家族からの批判を受けるケースもあるそうです。日本政府がより被災者へ関心を示し、特に保障や保護を重視するような政策を実行して欲しいと思えました。実習の締めくくりとして、寿地区を訪問しました。そこはいわゆる「貧民街」で、貧しい人たちが寄り添って暮らしています。来日前には想像もしなかった日本社会の実像でした。しかも驚いたことには、日本各地にこのような街があり、助けを必要とする人々がいることです。私達はちょうど夏祭りに参加しました。まるで「一夜市(ナイトマーケット)」のようで、近隣の人々も集まり、大変な盛り上がりでした。スタッフとお客さんが一緒に楽しんでいて、こうした関係は素敵だと思いました。

2013年度台湾交換交流会計報告
(2013年5月~9月)

収入		
2013/5 ~ 2013/7	献金 (42件)	569,000
前年度繰越金		53,000
収入の部合計		622,000
支出		
2013/6 ~ 2013/9	研修費 (交通費・食費を含む)	257,432
2013/6 ~ 2013/9	通訳等の謝礼	154,294
合計		411,726
次年度繰越金		210,274
支出の部合計		622,000

この地区について知る人は少ないようですが、私達が実習を通してここでの出会いを経験できたことは、とても良かったと思います。夜には、パトロール(夜回り)に同行しました。野宿する人々に日用品やジュースを配りましたが、より多くの助けを求められていると感じま

した。彼らがいまこのような生活を送っているのは、決して自らそう望んだからではなく、環境的な要因から、そうせざるを得ないのだと思えました。またここで、私は初めて、コイン式のシャワーを利用して、コイン式のシャワーを利用しました。コイン式なので、普段とは全く違う感覚で新鮮でした。これからも寿地区で、働かれる牧会者やスタッフの方々の上に、神様が豊かに臨んでくださるよう、お祈りしています。

新任講師紹介

吉田新



をして下さった方々にも感謝しています。また、私達を迎え入れて下さったご家庭のみならず、皆さまにも感謝しています。実習中のわたしたちの健康をお気遣い下さり、おかげさまで、毎日のチャレンジに備えることができました。みなさまのお働きの上に、神様の祝福がありますよう、お祈りしています。

今学期から「新約聖書時代史」を担当いたします吉田新です。どうぞ、よろしくお願いたします。わたしは長い間、ドイツの南西部に位置するハイデルベルクという街で学んでいました。この街の名前をどこかで聞いたことがあるかと思えます。そうです、あの有名な改革派の信仰問答集である『ハイデルベルク信仰問答(Heidelberger Katechismus)』が生まれた街です。今年はこの信仰問答集が出版されて四五〇年になります。キリスト教の教えを平易な言

葉で説明した『ハイデルベルク信仰問答』は、現在でも広く読まれており、多くの言葉に訳されています。この問答は、次のような問いから始まることでも有名です。「健やかなときも、最後の息を引き取るときにおいても、あなたのただ一つの慰めは何でしょうか。」この問答集が長い時間を経ても色あせず、人々の心をひきつけてやまないのは、この言葉をもって始まるからではないでしょうか。冒頭の一文はドイツ語で「Im Leben und im Sterben」とあり、普通、「生きるにも、死ぬにおいても」と訳されます。しかし、わたしは原文の意図をくんで、先のように思い切って意識したいと思えます。人々が新しいキリスト教のあり方を求めた宗教改革の時代、この問答の最初の一文は、読者に本質的なものに目を向けることを促したと思えます。健康でいるときも、死を前にしたときも、喜びのときも悲しみのときも、若い力がみなぎるときも、老いて体の自由がきかないときも、どのようなときにおいてもわたしたちが優先すべき本質的な事柄とは何か。あなたの魂を慰めるものは何か。この問答の第一の問いは、時を経たいまでも

わたしたちの生き方そのものを問い、わたしたちを揺さぶります。

今年の春、ハイデルベルクでの学びを終えて、この街にわたしの歩んだ証を刻むと共に、この問いを大切にかばんに入れて、日本に戻ることを決意しました。聖書の学びを通して、この問いを皆さんと一緒に考えることができればと願います。

夏期実習報告

竹花牧人



今回は七月一二日から八月二五日まで滋賀県の水口教会という所で教会実習をしました。私自身父親が牧師、母もクリスチャンという家庭で育ったので、教会の仕事については理解しているつもりでした。しかし、実際、実習教会で牧師の仕事を任せられると自分がいかに牧師の仕事を安易に考えていたかがよくわかりました。

仕事の内容は多くにわたり、幼稚園もあつたことから、子供達との触れ合い、さらには、畑での雑務、電話番号、郵便物の仕分けなど、これらほどのような仕事でも当たり前に行うことと思えますが、私にとつて教会で、こういった仕事をするのは始めてでとまどいが沢山ありました。

また日曜には説教を計四回任されました。自分の勉強不足を実感しつつ説教というものに対する意識が変わりました。私は普段あまり出席教会でもメモを取ったりなどして話を聞いているわけではなく、信徒さん達がいかに真険に牧師の話を聞いているかが今回の実習で分かりました。説教するというのは信徒さん達に対して大きな責任をもつことだと理解しました。

このような、実習はそう何れも経験できません。それなのでもっと多くのことを学びたかつたと感じています。実習の最後の日に水口教会の谷村牧師から、もう一週間ぐらいいなさいと言われました。学びたいことや議論したいことは沢山あったのですが、実をいうと、夏の実習で体調を壊していたので帰らざるを得ませんでした。

私は精神疾患を抱えておりその影響で、実習中も眠れない日が何度もあり、食事もとれないほど吐き気などがありました。慣れない土地でしたので、ストレスもかなりありました。

しかし、これから私が牧師になるとき、牧師が信徒達を励ましたり、悩みを聞いてあげる状況になった時病氣は決して言い訳にはならないと強く感じ、本格的に治療に励むようにしようと思ひました。ただ、自分が決して強気な者ではないので、これから常に神さまに頼り努力したいと思ひました。

八月の一カ月、センター事務所の二階に泊まりこみ、主事の小林明さんの指導のもと、毎日灼熱の大阪、京都、滋賀の地を歩いた。▼釜ヶ崎と呼ばれるドヤ街には、大勢の日雇い労働者や路上生活者がいる。夜十時半から夜まわりを

部落解放センター実習

小手川 到



し、ひとりひとりに「お身体大丈夫ですか」と声をかける。先日も孤独の中で息を引き取った人がいたそうだ。彼らは社会的な弱者かもしれない。しかし日雇い労働で己の肉体を捧げる人あり、山ほどの空き缶を回収し業者にキロ90円で販売する人あり、貧しくともたくましく生きようとしている。そして彼らを支える多くの人々に出会った。▼戦前に岸和田紡績で女工として働いていた朝鮮人労働者の足跡をたどった。植民地だった朝鮮の農村から大勢の女性たちが岸和田に送られた。十二時間労働二交代制、粗末な食事、何より差別が彼女たちを苦しめた。多くの女工さんが結核やチフスによって命を落とした。大阪南部や四国の被差別部落、沖繩や五島からの女性たちも岸和田紡績に来て働いた。貧しさの中で過酷な労働環境に耐え、民族差別や部落差別の苦しみの中に生きた女性たちの深い悲しみに出会った。▼今年は狭山事件発生から五十年にあたる。石川一雄さんは人生の大半を部落差別による冤罪を背負って生きてきた。その石川さんから直接お話を伺い、ビラ配布や部落解放劇等を通して部落問題を考える機会を得た。解放劇(写真)でセリフの無い教

会役員の役を与えられ、人間がもつ差別の根深さを考えることができた。石川さんとの力強い握手は忘れられない。晴れて無罪判決を勝ち取り真の人権を取り戻す日が来ることを願う。▼差別戒名についても学んだ。死後まで人を愚弄し、墓石に差別的戒名まで刻みつける人間の悪意の歴史に戦慄を覚えた。差別を無くすにはどうしたらよいか。あ

る人は解放運動をしようと寝た子が起きるから静かにした方が良いという。部落問題を扱わないようにして人々の記憶から部落問題そのものを消去しようとするアプローチは、本質的な問題の解決にはならない。大切なのは差別とは何か、これまでにどのような差別があつたのかを正しく知り、差別された人たちの悲しみと苦しみの前に実際に立つことだ。実習で出会った全ての人に教えられた。

寿町を体験して

沼田弘行

日本三大寄せ場の一つ、日雇い労働者の街であつた寿町も、今は高齢化が進み、生活保護者の街と化している。路上で朝から酒を飲んでる人、診療所に列を作り並ぶ人、さやかにあるギャンブル施設(ポートピア)に向かう者、一

辺が三百メートルの正方形の内に、介護事務所、労働福祉会館を中心に福祉施設が点在する街。簡易宿泊所の街。弁当持ち（刑務所入所経験者）であることを自分から初対面の者に恥じることなく話して行く。何なのだろうか？自分のマイナスな部分をオープンにさらけだせるのは、この街が成せる業なのか？ある意味ですごい事だと感心させられる。

景気の良い時に企業の手となり足となり、労働力を提供し貢献するも、彼らに未来の保証はない。でも、人々はこので生活し続ける。ここで生活している人の「好きでここに来た訳じゃない」の言葉を聞き、今の政治施策に疑問を抱く。

色々な事情で、家族、兄弟、そして今まで共に生活していた周りの人々から離別しなければならなくなった人々。でもここに住む人々は決して落ちこぼれではない。弱者でもない。生活保護を受け取っていないとはいえず、心は病んでいない。

いや、むしろ一般人と呼ばれ、毎日同じ電車に同じ時間に乗り、会社に行き、与えられた仕事を無難にこなし、時間になれば仕事を終えて家に帰る人。家に帰りたくない者



は立ち飲み屋に一人か仲間と寄り愚痴をこぼす。愚痴をこぼす人々が不憫に思えた。ここ寿の人の方がどれだけ人間のか思い知らされる。

ここに住む人は、フレンドリーな人が多い。街を歩くと気軽に声を掛けてくる。自分の子どものころを思い出す。近所のおじさんに、よく怒られたものだし、たまに拳骨を一発食らう。なつかしき良き時代だった。

いつ頃からだろうか、隣近所の事を気に掛けないようになり、隣の子どもを注意しなくなったのは。社会のせい？教育のせい？いや違う。一人一人が世知辛くなってきた。一人一人の事を気に掛ける余裕がなくなり、今を生きる事で精一杯なのだ。隣人を気にする事なく、歩きながら携帯電話を操作する。周りの迷惑を考えない。自己中心の社会は、どこか病んでいる。

◇神学校日には以下の教会から依頼があり、学生、教師を派遣した。埼玉和光教会、六角橋教会、上大岡教会、鶴川北教会、まぶね教会、小金井教会、三鷹教会、上星川教会、鶴川教会、大泉教会、城西教会
◇一〇月一九日（土）午前一〇時～午後二時。農伝デイ（農村伝道神学校オープンキャンパス）を行った。



本校講師でもあり桜美林学園キリスト教センター主幹の本田栄一氏により、記念講演会「ストー牧師と農村伝道神学校」が行われ、盛会の中、初代校

長A・Rストーン宣教師の生涯をたどりながら、準備された資料に基づき農村伝道神学校の歴史と理念を改めて興味深く聞く事ができた。その後、交流タイムで軽食、喫茶、物品販売、後援会コーナーなどを楽しみ、近い将来農伝入学を希望する人々と語り合うときを持つ事ができた。

お知らせ

◎第一回入学試験
十一月二〇日（水）午前九時～午後三時

◎アドヴェント礼拝
十二月六日（金）午後六時
神学校礼拝堂にて。
メッセージ：陣内大蔵牧師（東美教会）

◎今年度特別講義
日時…十一月一〇日（火）一
二日（木）
テーマ…「キリスト教の成立と反ユダヤ主義」
講師…上村静氏
日時…十一月一三日（金）
テーマ…「キリスト教」というアイデンティティー」
講師…佐藤研氏

公開としますので、聴講ご希望の方は事務室までお申し込みください。一日につき三千元。

なお昼食ご希望の方は、お弁当を申し込むことができます（五百円）。申し込みの締め切りは十二月六日（金）午後四時です。
駐車スペースはありません。（なお、前号の学報でお知らせした日付に間違いがありましたので訂正いたします。）

—— 2014年度入試案内 ——

- 入学試験
第1回 2013年11月20日（水）
第2回 2014年2月26日（水）
- 入学試験科目
(1) 小論文 (2) 新約聖書・旧約聖書
(3) 面接
・学校案内・入学願書・過去の試験問題等は神学校事務室まで請求下さい。
- ※ 学校見学・体験入学
希望する方は事務室に申し出下さい。授業参加、食堂の昼食、教師との面談をすることができます。

農村伝道神学校
〒195-0063 東京都町田市野津田町2024
Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711
Eメール：noden@pony.ocn.ne.jp
ホームページ：http://www11.ocn.ne.jp/~noden/
振替番号
農村伝道神学校 00160-6-18485
農村伝道神学校後援会 00120-6-24418